The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本人フランス語学習者におけるフランス語肯否疑問文の文末イントネーションについて
Author(s)	蒋, 晴
Citation	大阪大学言語文化学. 2023, 32, p. 51-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91157
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本人フランス語学習者におけるフランス語肯否疑問文の文末イントネーションについて*

蒋　晴**

キーワード：フランス語肯否疑問文、イントネーション、フランス語発音指導

Cette étude porte sur l'intonation des énoncés de question totale de la langue française chez les apprenants japonais. Les questions totales, qui n'apportent pas une inversion syntaxique, sont accompagnées d'une fréquence fondamentale montante.

Notre étude, qui porte de l'intérêt sur la montée intonative, tente de comparer les courbes d'intonation des apprenants japonais avec celles des locuteurs français. Pour déterminer si les voyelles en fin de phrase sont différentes ou non, nous observerons si l'intonation de la phrase interrogative est différente ou non (Sujet de recherche 1). Nous montrerons les résultats d'une expérience concernant la prononciation avec 26 phrases courtes ayant différentes voyelles finales. Et en plus, nous voulons examiner s'il existe une corrélation entre la longueur de voyelle finale et l'amplitude de montée intonative à la fin (Sujet de recherche 2).

Le corpus consiste en des enregistrements où 6 apprenants japonais de la langue française et un groupe de contrôle de 3 locuteurs natifs lisent ces 26 questions totales. Nous avons transcrit les courbes d'intonation par le logiciel qui s'appelle Prosogram. Selon Mertens (2004), Prosogram peut analyser les changements de hauteur de parole et décrire les courbes intonatives qui sont similaires au mode de perception de l'intonation par les auditeurs.

Les résultats montrent que les questions prononcées par les locuteurs de langue native française sont plus amples que celles des apprenants japonais. Quand les questions finissent par les voyelles [a], [o], [u] et [ɛ], la différence entre les apprenants japonais et les locuteurs de langue native française est signifiante. Ces quatre voyelles sont toutes très fréquentes dans la langue japonaise. Autrement dit, il existe un transfère négatif pour les voyelles qui sont fréquentes dans la langue japonaise. La longueur de la voyelle finale et

---

* L'intonation des questions totales dans la parole des apprenants japonais de la langue française.（JIANG Qing）

** 大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻博士後期課程

l'amplitude de la montée intonative sont faiblement corrélées. De plus, cette corrélation est positive.

1 はじめに

言語によって、習得する際の難所は様々であるが、その中でも日本人フランス語学習者がフランス語の肯否疑問文の文末イントネーションを習得することは難しいと言われている。筆者は、日本人フランス語学習者との私的な会話において、フランス人との会話で質問をしたのに質問として認識されることがなく、また質問をしていないのに急にOui（はい）、Non（いいえ）で答えられたという体験をしたと度々聞いたことがある。

フランス語の肯否疑問文、全体疑問文は疑問詞が無く、イントネーションのみで疑問の意味を表現するため、構文レベルでは平叙文と同じである。つまり、正しいイントネーションで発話されない場合はフランス人母語話者に疑問文であることが伝わらない可能性がある。フランス語の肯否疑問文を相手に正確に伝えるためには、正しいイントネーションで発話することが重要である。

本研究の目的は、日本人がフランス語を学習する際の難点の一つである、フランス語の肯否疑問文のイントネーションに着目して、先行研究によって示されたフランス語の肯否疑問文の発話における日本人の特徴の精査と母音の細分化を行い、考察することである。

2 先行研究

2.1 フランス語の肯否疑問文のイントネーションの研究

本研究の対象は文末上昇を特徴とする肯否疑問文（La question）である。上昇調であるイントネーションには、肯否疑問文（La question）以外にも、継続調（La continuation majeure & La continuation mineure）とl'implication[1]がある。同じ上昇調でも、それぞれ上昇の仕方が異なる。

Rossi（1981）は、疑問調の文末上昇と継続調の文末上昇の違いとして以下の二点をあげた。一つ目は、疑問調の上昇は継続調より急激であり、上昇の始まりも疑問調より継続調の方が早いことである。二つ目は、継続調の文末母音の持続時間は疑問調より長いことである。これらを区別し、正しいイントネーションで発話することは、日本人学習者にとっては難しいと言われている。

ここでは、フランス語の肯否疑問文の特徴を「構文レベル」「イントネーションレベル」

[1] Delattre（1966）によると、F0がまず上昇した後で軽く下降するのはl'implicationの特徴であり、それによって、伝えるメッセージの言外に匂わせる意味（sous-entendu）を表している。

「文末母音レベル」の三つの部分に分けて先行研究を紹介する。

まず「構文レベル」では、青木（2018）は東京外国語大学フランス語話し言葉コーパス（エクサンプロヴァンス、2010）を用いてフランス語の肯否疑問文（YNQ）の特徴を記述した。肯否疑問文の統語的構成は全体を通して、「SV 型」が 8 割以上であり、「ECQ 型[2]」が 1 割程度である。動詞と主語が倒置する「VS 型」は全く無い。つまり、「SV 型」が肯否疑問文の中で最も頻繁に用いられる。

次に「イントネーションレベル」については、Vaissière（2006）によると、フランス語の肯否疑問文でのイントネーションには主に以下の二つの特徴がある。

一つ目は、肯否疑問文ではイントネーションの自然下降の消失が観察されることである。二つ目は、肯否疑問文の最後かその一つ手前のシラブルからイントネーションの上昇が観察されることである。

最後に「文末母音レベル」の特徴に関して、Delattre（1966）は文末、句末の延長はフランス語の発話の基本的な特徴の一つであると説明している。また、西沼・代田（2007）はフランス語の上昇調は一般的に、母音の長音化を伴う場合が多いことを明らかにした。特に、文末上昇を含む疑問文においては、その他の文での長音化の倍の長さになると述べている。

2.2 日本人学習者のイントネーション学習での問題点

Hallé & De Boysson-Bardies & Vihman（1991）によって、日本人の幼児とフランス人の幼児がそれぞれの母語を話す時では、日本人の幼児の方が発話時のイントネーションの上昇が少ないことが観察された。つまり、フランス語の上昇調疑問文の文末イントネーションは日本人にとって馴染みがない。

日本人のフランス語の肯否疑問文での発話の問題点は、これまでにも多くの先行研究によって指摘されてきた。先行研究では、以下の 4 点が確認されている。

① 日本人学習者がフランス語を発話する際のイントネーションは、メロディー平坦化の現象が発生し、その上、文末でのイントネーションの上昇が不十分であることも観察されている（阿南 , 1978）。

② 多くの日本人学習者は文末でのイントネーションの上昇度合いが十分でないと同時に、文末の自然下降の消失を伴っていないことが観察された（Kamiyama & Sakamoto, 2010）。

---

[2] 疑問マーカー「Est-ce que」が文の先頭に現れる疑問文のことである。

③ 日本人学習者が発話する疑問文はフランス人母語話者に、疑問文や継続調、もしくはその間として認識されると観察された（Kamiyama & Sakamoto, 2010）。
④ 日本人学習者がフランス語の疑問文を発話するとき、日本語のイントネーションパターンを用いる場合が多くあることを確認している（中川 , 1996）。

確かに、これらの先行研究では、日本人学習者が発話する際の問題点をいくつか明らかにしてきたが、未だに研究の余地が存在している。まず、殆どの研究では、同じ種類の疑問文に対し、文末に異なる母音を用いた時に生まれる差が分析されていない。その上、大多数の先行研究では、イントネーションの起伏や文末イントネーションのパターンに注目してはいるが、文末母音の長音化については、ほとんど注目されていない。最後に、文末母音の長さと文末上昇の度合いの関係はまだ明らかにされていない。

以上のことより、本研究が取り組む課題として以下の 2 点を挙げる。

① 日本人学習者が発話するフランス語の肯否疑問文の特徴を明らかにするため、母音の細分化を行い、異なる母音のパターンに応じて、日本人が発話する文末のイントネーションのパターン、文末母音の長さ、文末上昇の度合いなどがフランス人母語話者とどのように異なるかを調べる。
② 肯否疑問文における文末母音の延長と文末上昇は具体的にどのような繋がりがあるかがまだ明らかにされていない。その両者の相関性についても考察する。

3 フランス語の肯否疑問文の音読実験

3.1 実験の目的

本研究では、日本人学習者とフランス人母語話者のイントネーションの曲線を対照し、文末母音別に考察する。本研究が考察する文末母音は［ɑ］［ə］［ɥ］［w］以外の 15 パターンの母音である。同じ母音でもそれが開音節の中にあるか閉音節にあるかによって、文末のイントネーションの発話に影響があるかを探究したい。そのため、開音節のみに現れる母音と閉音節のみに現れる母音以外の母音を開音節と閉音節の二つのパターンに分けて、最終的には 26 個の文末母音パターンについて考察する。その 26 個の文末母音パターンが現れる短文を使い（26 個の短文を p1 ～ p 26 で表す）、音読実験を行った。この実験を通して、主に以下の 4 点を観察する。①日本人学習者とフランス人母語話者の文末イントネーションのパターンを母音別に、差異の有無を観察する。②日本人学習者とフランス人母語話者の文末上昇の度合いを母音別に、差異の有無を観察する。③日本人学習者とフランス人母語話者の文末母音の長さを母音別に、差異の有無を観察する。

④以上の①から③の結果から、さらに文末母音の長さと文末上昇の度合いを調べ、そこに相関があるかどうかについても考察する。

3.2 実験協力者

本研究では、実験協力者を母語話者と学習者を 2 つの群に分けた。実験協力者は、年齢、学習者のフランス語学習歴、留学経験などのファクターを考慮して集めた。実験協力者は 24 歳から 28 歳の女性 9 名である。フランス人母語話者 3 名はフランスの大学で言語学を専攻する大学生であり、全員グルノーブル出身である。日本人学習者 6 名は日本の大学でフランス語を現在専攻している学生、またはすでに卒業した元学生である。フランス語圏での留学経験がある場合はいずれも数か月～ 1 年未満であり、留学経験がない学習者も含まれる。

本研究では、F1、F2、F3 は 3 名のフランス人母語話者を表し、J1、J2、J3、J4、J5、J6 は日本人学習者 6 名を表す。

3.3 実験方法

具体的な実験方法は、まず、Zoom やメールなどで実験協力者に本研究の目的や録音の注意事項を説明する。その後、参加者は自宅で実験文の録音を行う。それらの録音を収集し、音声資料の処理、及び分析を行った。実験文を読み上げる際は、26 個の実験文を順番通りに一回だけ読み上げることにした。実験に使用した録音装置は被験者のスマートフォンである。録音している環境はどれも静かで、雑音が少ない環境であった。その上、収集した録音に対しノイズ処理を行った。その後、録音素材を 26 個の短文に分割し、母音別に分類した。文末母音の長さを同比率にするため、praat[3] の機能で、全ての実験文の長さを 1 秒に統一した。この機能は全ての母音子音を同じ比率で調整しているので、実験結果に影響が生じない。その後、prosogram[4] の自動音素分割の機能を利用して、音節の区切りと音素の付与を手動で行った。最後にイントネーションの曲線を転記した。

イントネーションを知覚する際の重要な要素は母音であり、いわゆる、アクセントの中核である。prosogram はそのアクセントの中核を基本単位として、イントネーションの曲線を転記する。この転記されたイントネーションの曲線はイントネーションを知覚するパターンに対応するものである。

---

[3] Praat は音声学における音声分析用のフリーソフトウェアである。
[4] prosogram は「praat」に搭載されているソフトで、音声のピッチ変化を分析し、聞き手のイントネーションに対する知覚のモードに類似するパターンでイントネーションを記述することができる。

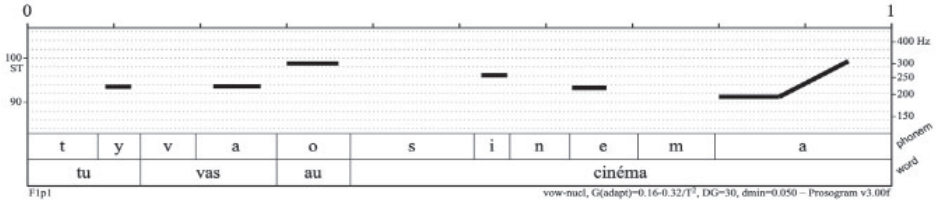

図 1　prosogram の分析例 F1p1 Tu vas au cinéma ?

3.4 結果

3.4.1 文末イントネーションのパターンの測定結果

3.4.1.1 文末イントネーションのパターン

文末イントネーションパターンは LL、HL、HH、LH の四種類に分けられ、LL トーンと HL トーンは上昇調として知覚されず、一方、HH トーンと LH トーンは上昇調として知覚される。青木（2018）によると、LL トーンは、上昇調にも下降調にも知覚されないものである。HL トーンは、最終のイントネーションは上昇するが、最後には少し下降し、前の音節より低くなる文末イントネーションのパターンである。一方、HH トーンと LH トーンはいずれも上昇調として知覚されるが、LH トーンは HH トーンより上昇がはっきりしている。

本研究では、母語話者を対象とする知覚実験は行っていない。しかし、本研究で扱っているイントネーションの曲線は人間の認知モデルに対応するので、prosogram によって転記されたイントネーションの曲線で HH と LH で判別されるものは、上昇調として知覚されることに相当する。

3.4.1.2 日本人学習者とフランス人母語話者の発音結果

本研究のデータにより、日本人学習者が発話した肯否疑問文は 80％以上が上昇調であるが、フランス人母語話者の 96.15％と比べるとそのパーセンテージは低いということがわかる。

表 1　母語話者と学習者が発話する文末上昇調の確率

	フランス人母語話者			日本人学習者					
	F1	F2	F3	J1	J2	J3	J4	J5	J6
非上昇調	3	0	0	6	2	8	7	5	2
上昇調	23	26	26	20	24	18	19	21	24
上昇調のパーセンテージ	96.15％			80.77％					

つまり、様々な先行研究が明記しているように、日本人学習者が発話する肯否疑問文の文末イントネーションは上昇調ではあるものの、母語話者との差は依然として顕著である（$p = 0.00066 < 0.05$）。

開音節と閉音節、それぞれの文末イントネーションパターンを分析すると、いずれにおいても、日本人学習者の上昇調のパーセンテージは、母語話者には達していない。その上、日本人学習者が開音節と閉音節環境下で発話する疑問文の文末イントネーションパターンには有意差がない（$p = 0.75 > 0.05$）。

母語話者の発話が上昇調として認識される比率が100％未満の文は3文のみで、それ以外の23文では全て100％上昇調として認識された。図2は母語話者の発話の中で、上昇調として認識される比率が100％未満であったものを抜粋したものである。

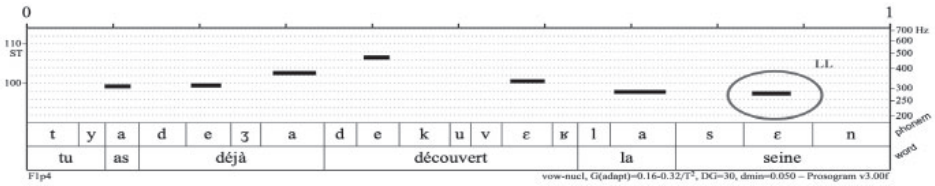

図2　上昇調として認識されなかった文末イントネーション（フランス人母語話者）

この結果は青木（2018）が主張した「上昇調と非上昇調の割合はおよそ2対1である」とは異なり、上昇調の割合がさらに大きくなったが、フランス人母語話者が短文を読み上げる際には、自然会話とは異なり、文末の上昇イントネーションを意識しながら発話していることがその一因と考えられる。母語話者が肯否疑問文を読み上げる際には、文末上昇のイントネーションのパターンを忠実に発音する傾向がある。母語話者が文末上昇のイントネーションを忠実に守ることは、文末上昇のイントネーションが肯否疑問文において重要であることを表している。

一方、日本人学習者においては、上昇調として認識されにくい文（100％未満のもの）の数は26文中16文であり、その中でも上昇調として認識される比率が70％以下の文は10文ある。

そして、特に上昇調として認識できない文（認識度合い50％以下）は4文ある。その4文の文末母音は全て閉音節環境の母音である。その上、上昇調として認識される比率が70％以下の10文の中で、8文の文末母音は閉音節環境の中の母音である。その原因として、元々実験文の中に、閉音節環境の文の方が比較的多いことが影響していることも考えられる（閉音節：14文；開音節：12文）。しかし、上昇調として知覚されにくい実験文の8割は閉音節環境の実験文であるため、日本人学習者の発話が閉音節環境の

中では文末上昇調として知覚されにくいことが推測できる。

本研究のデータから、日本人学習者の発話の中で、特に上昇調として認識されにくい母音（50％以下）のパターンは以下の４つである。

（1）p2［a'[5]］: C'est une vraie dame ?、p10［o'］: Tu veux une jupe jaune ?、p17［y'］: Tu veux boire une brune ?、p23［ɔ̃'］: Ils sont sur la même longueur d'onde ?

3.4.2 文末母音の長さの測定結果

本研究では、音節の区切りと音素の付与を手動で行い、その上で研究対象である文末の母音の長さを記録した。その結果は以下の通りである。

3.4.2.1 フランス人母語話者の測定結果

母語話者による肯否疑問文の発話においては、文末母音を長音化する現象が常に存在している。更に、文末母音の長さは文中の他の母音よりも明らかに長いことが観察された。

表２　F1p1：Tu vas au cinéma ? の母音の長さ

	文中の母音					文末母音
母音	[y]	[a]	[o]	[i]	[e]	[a]
母音の長さ（ms）	49.3	93.4	85.4	41.3	78.8	204.3

表２によると、母語話者が発話する文末母音の長さは文中の母音の２倍以上であることが観察された。

そして、3.4.1 節で述べた文末イントネーションのパターンでの特徴と同様に、母語話者の発話の文末母音の長さも文末母音の音節環境と関係がある。

[5] 本研究では「'」マーカーにより、閉音節環境の母音を示すことにする。

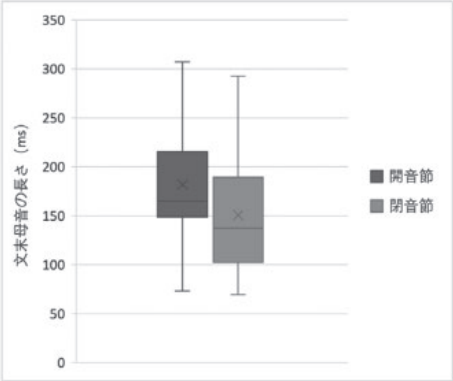

図３　開音節環境下と閉音節環境下の母音の長さの比較（母語話者）

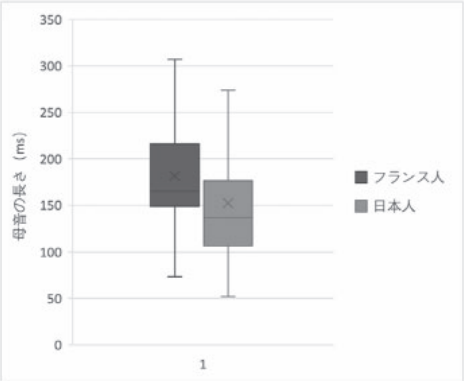

図４　母語話者と学習者の文末母音の長さの比較

図３はフランス人母語話者の開音節環境と閉音節環境における文末母音の長さの箱ひげ図である。この図から、文末母音が開音節のパターンの肯否疑問文を母語話者が発話する際には文末母音を長く発音する傾向があると言える。一方、閉音節環境下での文末母音は、母音の長音化は行うが、開音節母音には達していないことが観察された。

3.4.2.2 日本人学習者の測定結果

図４に示したように、相対的には、日本人学習者が発話する文末母音の長さは、フランス人母語話者より短いことが観察された。

日本人学習者の文末母音を文中の母音と比較すると、文末母音の長音化は顕著ではない。

日本人学習者の発話においては、文末母音を長音化する現象は明確に存在していない場合も多くある。表３は学習者 J4 が発話する例文 p1 に含まれている全ての母音の長さをまとめたものである。

表３　J4p1：Tu vas au cinéma ? の母音の長さ

	文中の母音					文末母音
母音	[y]	[a]	[o]	[i]	[e]	[a]
母音の長さ（ms）	64.1	136.2	109.5	----	94.7	116.1

表３により、学習者の発話において、文末母音の長さは文中の母音とは大差がないことがわかる。つまり、文末母音の長さと文中の母音との差はフランス人母語話者ほど顕

著ではないことが観察された。

母音別に考察した結果、その長さがフランス人母語話者との差が顕著[6]な母音は6つある。

（2）母語話者との差が顕著な母音：p23［ɔ̃］: Ils sont sur la même longueur d'onde ?、p1［a］: Tu vas au cinéma ?、p5［e］: Tu veux un café ?、p12［u］: Tu as un rendez-vous ?、p3［ɛ］: Tu parles français ?、p22［ɔ̃］: Ce vase trône dans le salon ?

以下の図5、図6では、母語話者と学習者の開音節のパターンと閉音節のパターンを比較した。図5はフランス人母語話者と日本人学習者の開音節環境での文末母音の長さの箱ひげ図であり、図6は、閉音節環境においての文末母音の長さの箱ひげ図である。

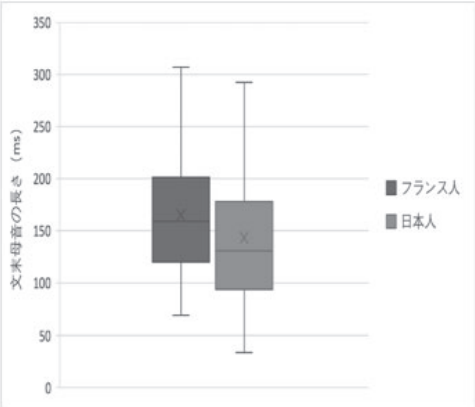

図5　母語話者と学習者の文末母音の長さの比較（開音節）

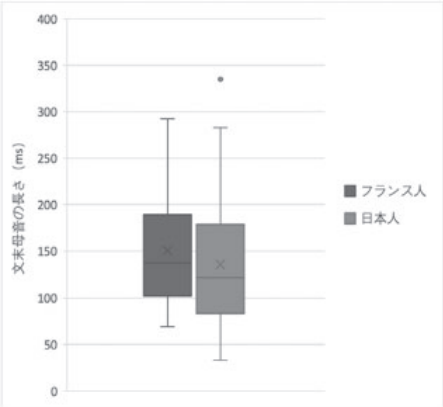

図6　母語話者と学習者の文末母音の長さの比較（閉音節）

図5と図6から、閉音節の場合の文末母音の長さについて、日本人学習者とフランス人母語話者の間に有意差は存在しない（p=0.29>0.050）が、開音節の場合は、フランス人母語話者との差が顕著である（p=0.02<0.05）ことがわかる。

フランス人母語話者と異なり、日本人学習者の場合は、文末母音の長さは、開音節環境と閉音節環境の間には大差が見られない。図7で示したように、日本人学習者の開音節と閉音節環境の母音の長さの差には、フランス人母語話者のような明確な差が存在しない。

[6] T検定により、$p < 0.05$ の母音である。

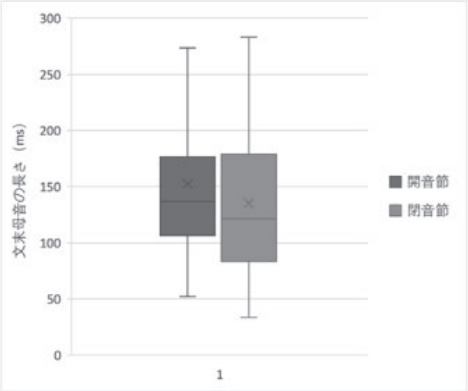

図７　開音節環境下と閉音節環境下の母音の長さの比較（学習者）

フランス人母語話者の文末母音の長音化の特徴は、開音節環境の母音＞閉音節環境の母音である。つまり、開音節の場合において、日本人学習者はフランス人母語話者と有意差がある原因は、母語話者は、閉音節よりはるかに開音節環境下では、文末母音の延長をおこなっているが、この特徴は日本人学習者の発話の中には見られない。日本人学習者の文末母音の長さは開音節にも閉音節にも大差がない。

3.4.3 文末上昇の度合いの測定結果

文末上昇の度合いに関しては､文末上昇の開始時点と終了時点の音調の差を記録した。そして、LL 型と HL 型は知覚レベルで上昇調として分類できないが、数値で見ると、文末の上昇は依然として存在しており、文末上昇の度合いを測ることができる。

フランス人母語話者の文末上昇は顕著である｡日本人学習者が発話する文末上昇には、フランス人と比べて顕著な差が存在していることが観察される。つまり、全体的に日本人学習者の文末上昇はフランス人母語話者のそれには達していない。

そして図８から、開音節のパターンと閉音節のパターン、どちらも日本人学習者とフランス人母語話者との差は顕著であるということがわかる。

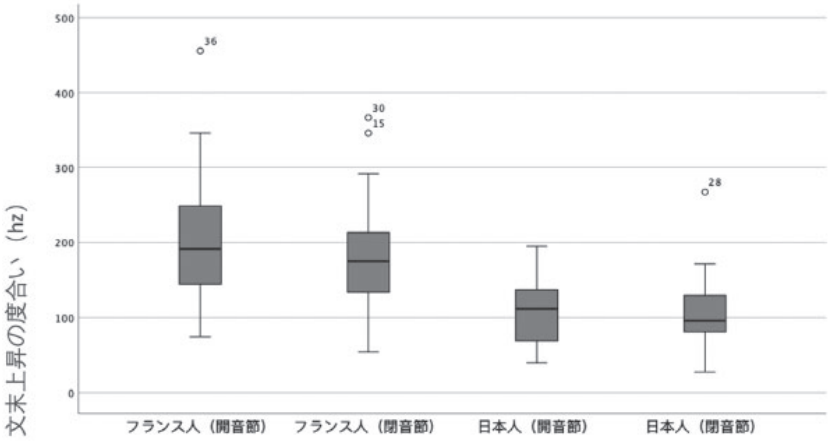

図８　開音節環境と閉音節環境の母語話者と学習者の文末上昇度合いの比較

母音別に考察すると、日本人学習者とフランス人母語話者との差が顕著な母音は以下の７つである。

（3）母語話者との差が顕著な母音パターン：p19［ɑ̃'］: Tu m'accordes ta confiance ?、p24［œ̃］: Tu aimes le parfum ?、p12［u］: Tu as un rendez-vous ?、p22［ɔ̃］: Ce vase trône dans le salon ?、p23［ɔ̃'］: Ils sont sur la même longueur d'onde ?、p9［o］: Tu veux de l'eau ?、p3［ɛ］: Tu parles français ?

これらの７つの母音の内４つが、先程９ページの（2）で言及した母音の長さの比較において日本人学習者とフランス人母語話者の差が顕著な母音と一致している。この結果は、文末母音の長さと文末上昇の度合いとの間には何らかの相関関係が存在する可能性を示唆している。また、p23［ɔ̃'］以外は開音節環境下の母音である。

3.4.4 文末母音の長さと文末上昇の度合いの相関関係

前節では、文末母音の長さと文末上昇の度合いの間には何らかの相関関係が存在する可能性があることに言及した。ここでは、Pearson の相関係数を利用して、両者の相関関係を考察する。

本研究のデータによると、文末母音の長さと文末上昇の度合いは正の相関関係である。その相関係数は約 0.202 と弱いが、有意水準は 0.02 であるということはその相関関係が顕著であることを示している。つまり、文末上昇の度合いと文末母音の長さは図９で示された様な正の相関関係にあるといえる。

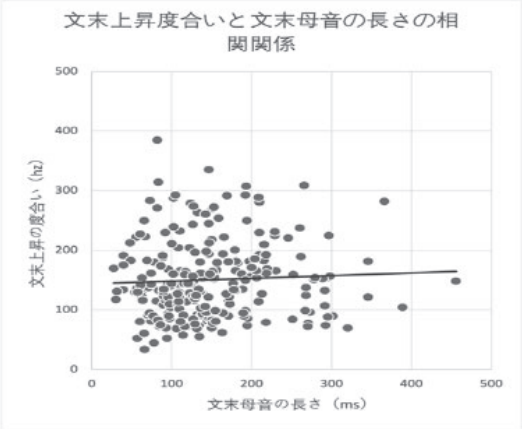

図９　文末母音の長さと文末上昇の度合いの相関関係

3.5 考察

① 開音節環境における有意差について

これまでに示した通り、開音節環境においては日本人学習者とフランス人母語話者の文末上昇の度合いや文末母音の長さには有意差が存在しているのに対して、閉音節環境においての差は顕著ではないことが確認された。

総体的に、フランス人母語話者の文末母音の延長の度合いの特徴は：開音節環境の母音＞閉音節環境の母音である。文末上昇の度合いの特徴も同じく：開音節環境の母音＞閉音節環境の母音である。つまり、フランス人母語話者は閉音節よりも開音節の方が文末母音の長音化と上昇をより顕著に発話している。

しかし、日本人学習者が発話する際には、文末母音の長さと文末上昇の度合いには開音節環境にも閉音節の環境にも大差がなく、フランス人母語話者に見られる２つの特徴は見られない。つまり、日本人学習者はフランス人母語話者とは違い、開音節と閉音節での特徴を明確に区別せず発話している。これは、日本人学習者とフランス人母語話者の開音節での文末母音の長さと上昇率の間に顕著な差が存在している原因であると考えられる。

イントネーションの発音指導の現場においては、全ての母音を一括して指導するのではなく、開音節環境下と閉音節環境下の区別を意識させる必要があると考えられる。

② 肯否疑問文としての有認性が低い文末母音のパターンについて

「肯否疑問文としての有認性が低い文末母音のパターン」では、３つの角度から計測した結果には、共通する母音が多い。その共通する母音は以下の５つである。

(4) 共通の母音：[a]、[o]、[u]、[ɛ]、[ɔ̃]

その中で、p23［ɔ̃］は、文末イントネーションのパターン、文末母音の長さ、文末上昇の度合いの 3 つの分類の中で現れた。それは、p23 が 26 文の実験文の中で一番長い文であることが原因であると考えられる。p23 は比較的に長文であるため、先行研究で指摘された、日本人学習者が肯否疑問文を発話する際の問題点が他の短文より多く現れる。つまり、長文を発話する際には、日本人学習者が疑問文のイントネーションを保ち難くなると考えられる。

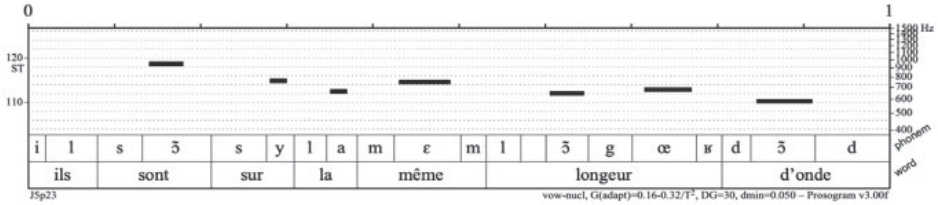

図 10　J5P23：Ils sont sur la même longueur d'onde ?

他の 4 つの母音 [a]、[o]、[u]、[ɛ] は全て日本語の中に存在する母音である。つまり、日本語の中に存在する母音において、日本語からの影響を受けやすいと推測できる。

③ 文末母音の長さと上昇の度合いの相関関係について

文末母音の長さと上昇の度合いには顕著な正の相関関係が存在する。つまり、文末母音の長さが長くなると、文末上昇を実現しやすくなることを示している。

相関関係があるということは因果関係があるということと同義ではないが、文末母音の長音化を意識しながら文末上昇を指導すると、フランス語肯否疑問文のイントネーションを発話しやすくなる可能性があると考えられる。

4 研究のまとめと課題

4.1 本研究のまとめ

本研究で指摘できたことを以下にまとめる。

まず、フランス人母語話者は、開音節パターンと閉音節パターンを分けて発話しているのに対して、日本人学習者ではその区別がされていない。つまり、フランス人母語話者は文末母音が開音節環境の場合には、文末上昇の度合いが大きく、文末母音の長さも長いのに対して、日本人学習者においては大差が見られない。母語話者の発話の傾向により、開音節環境と閉音節環境とで肯否疑問文の発話には差異が存在することを学習者

に意識させることは重要である。教育現場においては、開音節環境と閉音節環境を分けて、それぞれに特化した発音指導を行う必要がある。

次に、本実験のデータにより、日本人学習者が肯否疑問文を発話する際に、比較的に疑問上昇調として有認性が低い文末母音のパターンは [a]、[o]、[u]、[ɛ]、[ɔ̃] であることが明らかになった。しかし、3.5 の②で言及した通り、[ɔ̃] の場合は例文が比較的に長文である。そのため、日本人学習者の発話が文の長さによる影響を受けており、今回考察する母音とは別の要因があると考えられる。その他 4 つの母音は日本語に存在する母音であり、したがって、日本語の疑問文のイントネーションのパターンからの影響が生じやすいことが推測される。本研究では日本語の [a]、[o]、[u]、[ɛ][7] と表記しているが、実際日本語の母音はフランス語と異なる。例えば、日本語の [u] は厳密には [ɯ] に類似する。フランス語の発音指導においては、日本語の中に存在する母音を重視せずに、フランス語特有の母音に特化して訓練する状況になりがちである。フランス語の中の五母音を日本語の五母音と区別し、念入りな指導が必要になる。

最後に、文末母音の長さと上昇の度合いには顕著な正の相関関係が存在する。つまり、文末母音を長く発音することによって、文末上昇の度合いを向上させる可能性がある。教育現場では、文末上昇だけではなく、文末母音の長音化にも重点をおいて指導するべきであると考える。これによって学習者の発音の改善が期待されると考える。

4.2 今後の課題

実験文や実験協力者の数を増やすことで、より正確な結果を得ることができ、フランス語教育に貢献することができると考える。

今後の課題としては、肯否疑問文のイントネーション全体にフォーカスを当てて、文の文法要素が日本人学習者の発話に及ぼす影響と全体イントネーションの自然下降の消失に関する特徴を明らかにしたい。最終的には、音声解析ソフトを利用したフランス語のイントネーションに関する発音指導の方法を開発、改善したいと考えている。

参考文献

Delattre, P. (1966) Les dix intonations de base du français. *The French Review*, 40(1): pp. 1-14.

Hallé, P. A., De Boysson-Bardies, B., & Vihman, M. M. (1991) Beginnings of prosodic organization: intonation and duration patterns of disyllables produced by Japanese

[7] [i] も日本語に存在する母音であるが、(4) 共通の母音には表れなかった。それは [i] の母音の性質と関係があると考えられる。[i] は狭母音で前舌母音であり、元々上昇調で発声しやすい母音である。

and French infants. *Language and Speech*, 34(4): pp. 299-318.

Kamiyama, T & Sakamoto, M. (2010) Intonation des questions totales en français langue étrangère: suffit-il d'enseigner et apprendre la montée finale? *XXVIIIèmes Journées d'étude sur la Parole*, Mons, Belgique: pp. 393-396.

Mertens, P. (2004) The prosogram: semi-Automatic transcription of prosody based on a tonal perception model. In Bel, B. & I. Marlien, (eds.), *Proceedings of Speech Prosody*, Nara (Japan): pp. 23-26.

Rossi, M. (1981) Vers une théorie de l'intonation. In Rossi, M, A. Di Cristo, D. Hirst, P. Martin & Y. Nishinuma (eds.), *L'intonation: de l'acoustique à la sémantique*, Paris: Klincksieck.

Vaissière, J. (2006) *La phonétique, Que sais-je?* Presses Universitaires de France.

青木大輔（2018）「フランス語 Yes/No 疑問文におけるイントネーション」、国学院高等学校『外苑春秋』、8 号 .

阿南婦美代（1978）「フランス語上昇調疑問文を発する際、日本人話者に見られたイントネーションの干渉現象について」、『フランス文学論集』、13 巻、pp.25-44.

中川恭明（1996）「日本人フランス語学習者の疑問イントネーションに見られる母語の干渉」、『フランス語教育』、24 巻、pp.31-41.

西沼行博・代田智恵子（2007）「フランス語のイントネーションとその周辺（< 特集 > 諸言語のイントネーション）」、『音声研究』、11 巻、2 号、pp.55-64.